長野市立

博物館だより

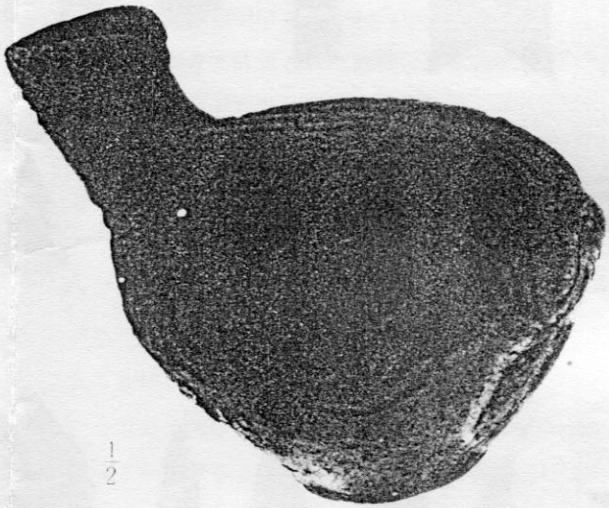
第6号 新収蔵資料展特集Ⅰ

発　行　　長野市立博物館
発行日　　昭和61年5月1日

長野市小島田町八幡原史跡公園内
〒381－22　　☎0262(84)9011

博物館だより発行にあたって

当館では、年間の博物館での事業及び研究の内容について、この博物館だよりをもって広く紹介して来ました。今回、昭和60年度中に博物館が収蔵した新しい資料を紹介する新収蔵資料展を開催したところ、その記録を求める要望が多く、急拠この特集号として展示資料の一部を紹介するとともに、昨年中の埋蔵文化財調査の概要をお知らせします。



1/2

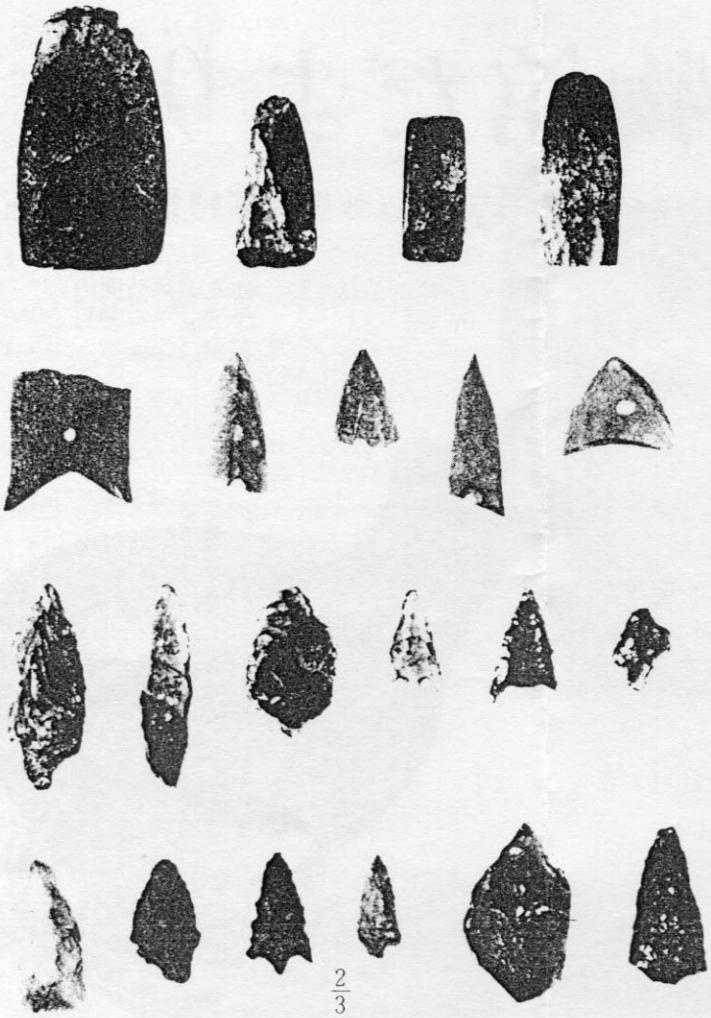
1/2

〔塩崎遺跡群・市道上町　越線遺跡

通称〝松節遺跡〟〕

千曲川が長野盆地に流入し、その両岸に長く発達した自然堤防上には、弥生時代以後の遺跡が多く発見される。特に右岸の長野市塩崎にあっては、後背湿地も発達し、古くから弥生時代の一大集落址として注目されていた。今回の調査は、その自然堤防上を縦に長く640米程の市道の拡幅改良工事を実施するための調査で、この附近一帯の遺跡に試掘坑を入れたような結果となった。

（上）水鳥の形の壷・（左）小型壷、ともに木棺墓に副葬されていた。

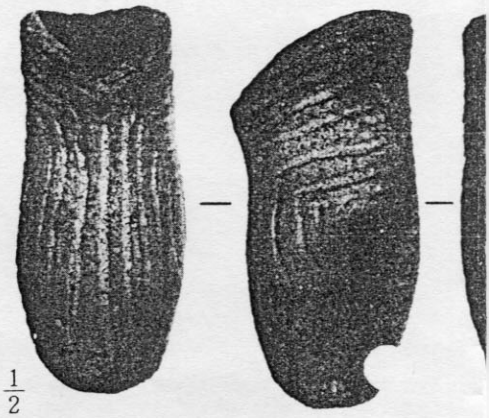


2/3

←〔松節遺跡出土　石器〕

遺跡は弥生時代中ころ（西暦前１世紀）か
代にまで及ぶ遺跡で、自然環境に恵まれた地
とを物語るとともに、度重なる洪水にもめけ
り、ムラに住みついていたことを示す資料か
た。（左）の石器は弥生期の住居址床面など
れたもので、石鏃が多く、狩猟に使われたも
は戦闘用のものか、磨かれた切斉な有孔の石

↓〔異形土器〕　首の部分に管玉を連らねて巻
の顔の前面に当たる位置に口部を顔に当てる
発見された土器である。埋葬された墓の構造
そこに屈葬された棺の頭部を包むようにこぶ
石を墓壙の中がいっぱいになるほどにつめて



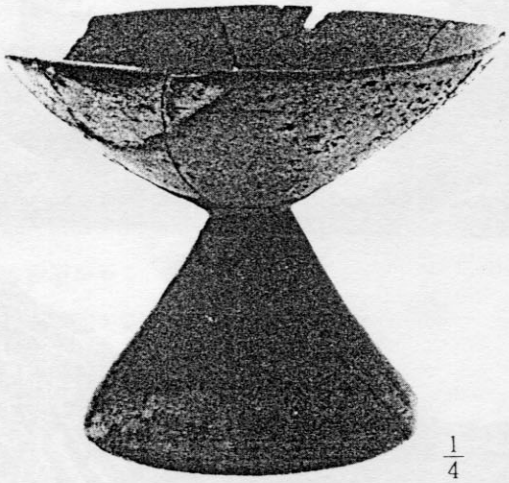
1/2

〔21号木棺墓内出土土器〕今回の調査で確認された弥生時代の墓は、全部で31基にも及び、中でも、その大半をしめる中期の墓は木棺墓であった。（下）は21号墓から一括して出土した。

ら、平安時
域であるこ
り、家を守
多く見られ
から発掘さ
のか、また
滅もあった。

き、被葬者
ような形で
は木棺墓で、
し大の河原
いた。

1/1



1/4

〔内行花文鏡と高坏〕

（左）の内行花文鏡は、5世紀初頭と認められる住居址の床面から、二つの自然石に挟まれるような位置で発見された。古墳から同様の鏡が出土する例は多く報告されているが、中でも、隣接の長野市篠ノ井石川にある、川柳将軍塚古墳出土の銅鏡として伝えられている鏡の中には、今回の内行花文鏡に非常に鋳造の技術や文様の構成の似ているものがある。さらに、近くの古墳から出土したと伝えられる同様の銅鏡の中にも類例がある。

今回の調査で確認された遺構は、大きく弥生・古墳から平安時代にわたる遺構で、中でも古墳時代のものは少なく、さらに残された遺物も少なかった。（左・下）の高坏は、そのうちの数少い資料のうちの一つで、この地方では出土例が少く、東海地方から直接影響を受けた土器である。弥生時代の中ほどから、稲を栽培するムラが誕生し、やがて村落が千曲川流域全体に影響を及ぼすほどの力をつけた様子を物語るような荘重さを感ずる高坏である。

昭和60年度の埋蔵文化財発掘調査

長野市の埋蔵文化財保護については、教育委員会事務局が所掌し、緊急発掘調査に関わる学術部門については、長野市立博物館の学芸係が担当している。昭和60年度における調査は、

1. 土口将軍塚古墳（学術調査）57年度～
2. 浅川扇状地遺跡群B・C・D地点59年度～
3. 三輪遺跡（三輪本郷）
4. 宮崎遺跡（若穂保科）
5. 吉田高校遺跡
6. 塩崎遺跡群市道上町　越線遺跡
7. 石川条理遺跡

などがあり、このうち土口将軍塚古墳の学術調査をのぞく6遺跡の調査は、何れも道路新設又は改良及び開発行為等に伴う緊急発掘調査であった。

限られた期間内に限られた調査員で実施しなければならないため、効率的に調査を進める必要があり、関係者に協力を得、遺漏のないよう細心の注意をはらい実施した。

その結果、浅川扇状地遺跡群各地点では、善光寺瓦として知られる布目瓦が発掘されたり、宮崎遺跡にあっては、縄文晩期の住居址を完掘、さらに、塩崎遺跡群では、東日本で初めての木棺墓や遠賀川系土器の発見など、多くの成果の得られた年度であった。

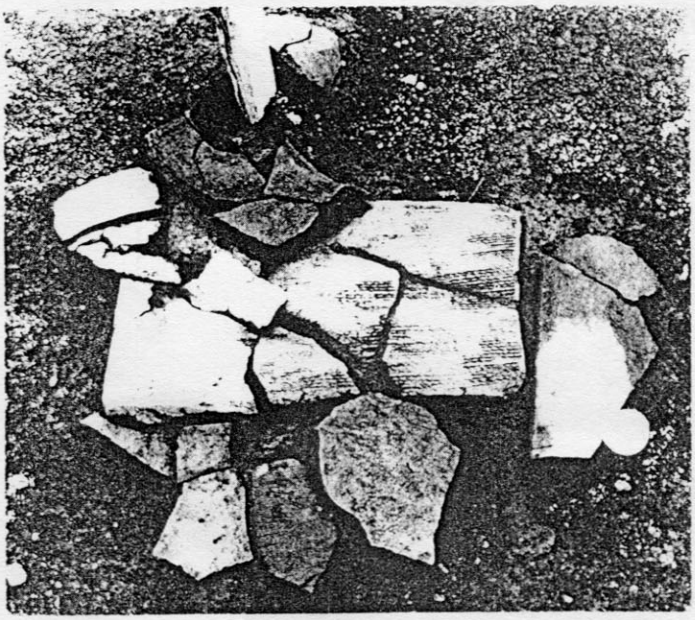
昭和61年度に続けて調査を実施する遺跡は宮崎・石川条理の各遺跡である。

昭和60年度新収蔵資料展は、前半（５月10日まで）は考古資料を、後半（５月12～６月15日）は歴史・民俗資料を中心に展示します。

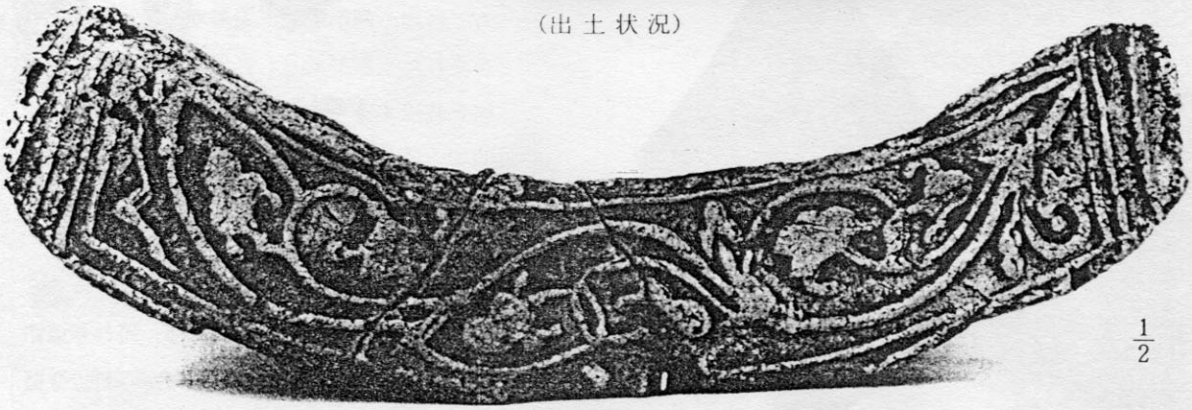
〔浅川扇状地遺跡群　B･C･D地点〕

長野市吉田にある県立吉田高校東側から、北に向けて直行し、三登山の麓近くから大きく右に曲る県道長野荒瀬原線（通称牟礼バイパス）の新設工事は、昭和56年度から始められた。この地域は浅川扇状地一円に分布する大遺跡群の一部で、そこに延長2,000米にも及ぶ大調査坑を入れるような発掘調査を３年次にわたり実施した。

出土する遺物は、弥生時代から平安時代にも及ぶ資料で、中でも、近隣に窯址があった布目瓦が住居址内から出土し、新たな論議を呼ぶ資料として注目されている。



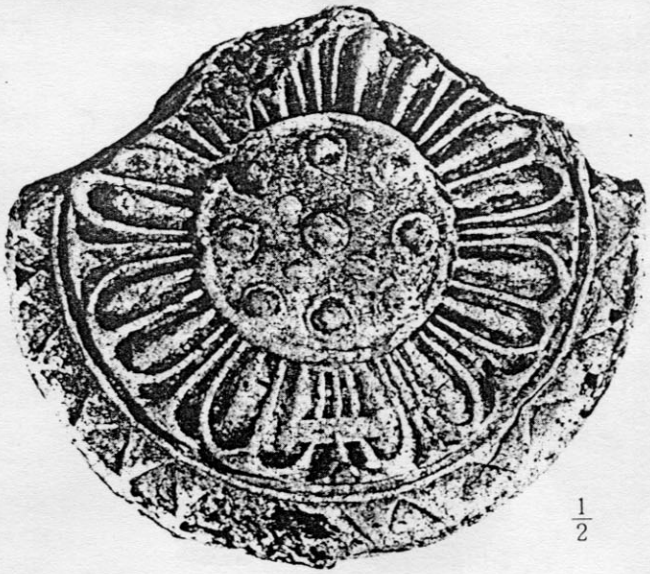
（出土状況）



1/2

〔いわゆる善光寺瓦の出土〕

かつて大正時代から昭和30年代にかけて、長野市元善町の旧善光寺本堂の建立されていた近くから発見された布目瓦は、７世紀後半にあたる白鳳期の伝統のある瓦で、善光寺瓦と呼ばれて来た。今回の調査では、住居址の床面から宇瓦（のきがわら）が、須恵器とともに発掘され、この瓦当部と同笵の宇瓦や鐙瓦（あぶみがわら）も出土、何れも善光寺瓦と同笵であることが確認された。



1/2